



音楽科教育における授業研究：
ストップモーション方式による授業研究を中心に

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 篠原, 秀夫 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.32150/00003738 |

音楽科教育における授業研究

—— ストップモーション方式による授業研究を中心に ——

篠原秀夫

I はじめに

毎年夏から秋にかけて、各地で教科教育に関わるさまざまな研究大会、公開研究授業、研修会が目白押しに開かれる。音楽教育界においても同様の傾向が見られる。これらの研究会では、あらかじめある研究テーマが設定され、それに基づいて研究授業や研究発表が行われる。さらにその後に、研究発表者（授業者）と参加者による授業検討会や反省会といった、研究テーマにそった討議が行われる。

しかしながら、これらの研究会が多く開かれるわりには、音楽科教育に関する授業研究の成果があがっていないというのが教育現場の現状ではなからうか。それは、研究会が従来の役割を十分に果たしていないことに原因の一端があるように思われる。

本来、研究会というものは、明日からの教育（授業実践）に役立つだけでなく、研究者の取り上げた問題を踏み台にして、自分自身の明日からの教育（授業実践）を考えていく上での力として作用すべきものである。

ところが昨今の研究会の実情はどうであろうか。

研究会で取り上げられるテーマは、毎年のように似かよったものが多く、マンネリ化している。

たとえば次のような例である。「創造的な表現力を生かした音楽の授業をするにはどうしたらよいか」「自ら学ぶ子どもを育てる学習指導はいかにあるべきか」「豊かな情操を養う音楽指導はどうあればよいか」

これらのテーマは、もっともつぶしのきく、つまりどのような解釈でも成り立つような適応性のあるものであり、研究会としては無難なテーマと言える。しかしこれらは、年を追うごとに積み重ねられ、討議の高まりの中で立証され、深まっていくものというよりは、その場限りの、当番校としてかっこをつけるためにだけ設定されることが多い。

また同時に、授業検討会においても、マンネリ化が見られる。授業の事実から離れたところで教育理念や目標論に関することが討議されたり、発言が印象批判的なものになりがちである。さらに検討会の最後は司会者や助言者のおきまりの抽象的な言葉でまとめられることが多い。

たとえば次のような例である。「授業を引き受けていただいて、しかも大変すばらしい授業を見せていただいて勉強になりました。」「授業改善の方向が見えてきたのではないのでしょうか。」

さらに次のような例もある。「すばらしい授業でしたね。これは〇〇先生でなければできない境地ですね。」「やはり最後は子ども理解ですね。いきつくところは学級経営なんです。学級経営がしっかりしているから、これだけの音楽の指導ができるんです。」

このようなまとめでは、研究会に参加する意味が薄れてしまう。〇〇先生の指導のどこがどのよ

うにすぐれているのか、しかもそれはなぜか、そのような討論がなければ、研究会の果たす意味はないし、参加する意味もない。音楽指導の「どこが、どうなのか」、「なぜ、そうなるのか」、これらを授業事実に基づいて、検討していくことが必要なのである。

このようなマンネリ化した、なれあいの研究会においては、テーマを熟考し、それがどのような角度から掘り下げられ具体的な教授活動と結び付いているのか、あるいは成果をあげているのか、等の研究を深め、進めて行くことは難しい。

本当の意味での研究がないというのが実情なのである。このような研究会を繰り返していたのでは、満足な授業研究は行われない。

授業研究においては、たとえどんな小さな問題であっても、授業の事実に基づいて検討が行われなければならない。

そこで、本稿は授業研究(授業検討会)の進め方に焦点を当て、ビデオを利用した「ストップモーション方式」を中心に取り上げ考察を試みるものである。この方式が音楽科における授業研究(授業検討会)においても実に有効であると考えからである。

II ストップモーション方式による授業研究

1 ストップモーション方式

ビデオを利用したストップモーション方式とはどのようなものなのか、最初に取り上げてみたい。藤岡信勝氏は、ストップモーション方式による授業研究会の案内の中で次のように説明している^(註1)。

「ここに一本のビデオテープがある。二台のカメラを使って一時間(45分)の授業を録画し、一本に編集したものである。

これを再生・視聴する。ただし、ずっと通して見るのではない。しばしば画面を一時停止させる(ストップモーション)。一時停止させておいて何をするのか。

解説者が、授業の背景説明をする。教師の発問や指示の意味を解説する。教材の特質を検討する。子どもの発言や行動の意味を解明する。授業の組み立てを分析し、評価し、批判する。

教師が発問しようとする、まさにその瞬間に、ストップモーションをかけ、どんな発問をするか、すべきか参加者に問う。子どもの反応についても同様に予想してもらう。

そればかりではない。授業の流れに身を浸す気分でビデオを見てみると、必ず御自分の経験にたらしめてひとこと言いたいことが出てくるはずである。そんな時、遠慮なく『ストップ!』と声をかけていただく。そして、発言していただく。

質問、疑問、思いつき、批判、代案、分析、等々何でも結構である。どんどん出していただきたい。参加者間の論争も歓迎する。活発な発言で、楽しい研究会にしたい。」

つまりこの方式は、授業ビデオの再生をしばしばとめながら、教師の教授行為の細かな検討、児童・生徒の発言・活動の解釈、その他教材と授業のあらゆる側面について集団の中で議論するというやり方である。

ビデオを使った授業研究がこれまでなかったわけではない。筆者が担当している「音楽科教育概論」「音楽科教育特論」「音楽科教育法」の授業でも、ビデオを使い授業検討をたびたび行ってきた。

その多くは、ビデオを鑑賞した後感想を書かせ、それを基に討論をするやり方である。

しかしこのやり方には、藤岡信勝氏も指摘している^(註2)ように、いくつかの難点があると言える。筆者なりに捉えているものをいくつか上げてみる。

第一は、一時間(45~50分)の授業を続けて鑑賞することは、たとえ大学生であっても苦痛であり、疲れることである。集中度もかなり異なってくるものである。したがって、一時間の授業の内容を学生全員が同じように記憶することは難しい。ある学生が覚えているところのある学生は忘れていたこともある。

第二は、討論で取り上げる発言の内容が、印象批判的になりがちである。個々の発言が、授業のどの場面に関してのことか、判断するのが難しい。また、討論の内容が次々に変わり、問題点の検討が深まらないのである。

それでは、従来のやり方とストップモーション方式の違いはどこであろうか。「再生中にビデオをしばしば止めて、議論するか、しないか」この違いである。この違いが実に大きいと言える。このストップモーション方式により授業検討会が非常に活発で意欲的なものとなるのである。

2 ストップモーション方式のメリット

ストップモーション方式は、従来のビデオ方式と比べて、どこがよいのであろうか。藤岡信勝氏は、次の三点を指摘している^(註3)。

- (1) 議論が授業の事実在即してなされる(実証性のメリット)
- (2) 問題を共有し定式化できる(生産性のメリット)
- (3) 誰でも口出しできる(平等参加のメリット)

その中で筆者は、(1)の「議論が授業の事実在即してなされる」が最も大きなメリットであると考えている。人間の記憶には限界がある。従来の授業検討会のように一時間の授業をまるごと鑑賞したのでは、授業の細部を記憶しておくことは難しい。授業者が不適切な教授行為をしている時、すぐその場で問題点を指摘した方が、参加者も授業者も納得がいく。あるいは、わからない点が出てきた時は、その場ですぐ聞いた方が納得がいく。つまり議論は終始、授業の事実と密着して行われなければならないのである。特に授業中の教師の教授行為を細かく分析したり、検討するにはこの点が重要である。

また、(2)に関して藤岡信勝氏は次のように述べている^(註4)。「参加者が研究会終了後『どの発言も参考になった』と異口同音にのべるのは、参加者全員で問題を共有できるからである。他の参加者の意見に異論がある場合でも、その意見が何をとりあげどう問題にしているかは理解できる。このように『問題の共有』が可能なのは、ビデオで授業を(間接的ながら)経験するという『経験の共有』があるからである。また、授業の検討をその場限りのものに終わらせず、一般的に役立つ知見を定式化していくことも可能である。たとえば、ある発問を『よい』と評価するだけでなく、『なぜよいか』を問えば発問についての一般原則を定式化できる。この定式化が可能なのは、前後の文脈と切り離さずに当該の発問を論じることができるからである。」

さらに、(3)に関して藤岡信勝氏は次のように述べている^(註5)。「ベテランの発言も初任者の疑問もすべてが生きる。参加者全員の知識・経験が役立つのである。だから、参加者の満足度も高い。ベテランも初任者も平等に口出しできるチャンスがあることは、この方式の大きなメリットである。」

このように、ストップモーション方式による授業研究には、従来の授業研究には見られない大きなメリットがあることがわかる。

Ⅲ ストップモーション方式による授業記録

1 授業記述としてのストップモーション方式

「ストップモーション方式」には次の二つの意味がある。一つはビデオを用いた授業検討会的方式であり、もう一つは授業記録の記述スタイルとしてのストップモーション方式である。現在、このストップモーション方式は、授業検討会と授業記述の両側面が支えあいながら授業研究のシステムとして広がりつつある。

ストップモーション方式の授業記録では、授業で生じた事実を文脈を切らずに記述することが目標とされている。そのために、授業中の教師と子どもの発語行為⁽¹⁶⁾、発語内行為、発語媒介行為、言語外行為等の必要に応じた記述とともに、発言内容の文脈的意味の記述や授業の構造関連の記述まで行われる。また、ビデオをとめた時に議論した内容を簡潔に授業記録の中に「注」に近い形「ストップモーション」で記述するのである。

その「ストップモーション」では、記録者のコメントが加えられる。つまり、その授業のすぐれた点を取り上げ、その意味を分析したり、問題点の指摘と改善策を述べたり、記録だけではわからない授業の伏線やつながりを解説したりするのである。

したがって、このストップモーション方式の授業記録は、従来の「T-C型」授業記録⁽¹⁷⁾とは明らかに異なるものと言える。

2 ストップモーション方式による授業検討

ここでは、筆者が担当している「音楽科教育法」の授業で実際に行ったストップモーション方式による授業検討を取り上げたい。

扱った授業は、1989年9月21日、釧路市立駒場小学校5年1組(男子14名、女子14名)で行われた、教育実習生山本雅子(北海道教育大学釧路分校音楽研究室三年生)さんの教育実習研究授業である。

ストップモーション方式による授業検討会は、参加者がナマの授業を参観してから再びビデオを視聴する研究会〔参観一視聴型〕と、ビデオで初めて授業を見ることになる研究会〔視聴オンリー型〕に二分される。この授業検討は、視聴オンリー型である。

この授業検討会の参加者は、授業者(実習生)を含み音楽研究室三年生10名と筆者を合わせ11名である。また、ビデオ撮影者である筆者が解説者を務めた。

教育実習生の研究授業ということで、授業検討会ではさまざまな角度から多くの鋭い発言が出された。次はこの授業のストップモーション方式による授業記録である。

(1) 授業計画の概略

① 題材名「白い雲」(二部合唱)

② 題材の目標

- * 曲想を味わわせ、フレーズを美しく歌わせる(白い雲)。
- * 柔らかい声で、響きのある合唱をさせる(白い雲)。
- * 和声の響きを味わわせながら合奏させる(エーデルワイス)。

③ 指導計画（6時間扱い）

- * 第一時・「白い雲」の範唱テープを聴いてイメージをつかむ。
 - ・聴唱する。
- * 第二時・「白い雲」の高声部を階名視唱する。
 - ・高声部の斉唱の歌唱指導（発音、プレス）。
 - ・「エーデルワイス」の第Ⅰパートをリコーダーで練習する（タンギング、プレス）。
- * 第三時・「白い雲」の低声部を階名視唱する。
 - ・低声部の斉唱の歌唱指導（半音階的音程）。
 - ・「エーデルワイス」の第Ⅱパートをリコーダーで練習する（タンギング、フレーズ）。
- * 第四時・「白い雲」の合唱をする（柔らかい声で歌う、頭声的発音）。
 - ・「エーデルワイス」をリコーダーで合奏する（拍の流れ）。
- * 第五時・「白い雲」の合唱をする（響き合い）。
（本時）・「エーデルワイス」をリコーダーで合奏する（音の重なり、和声の響き）。
- * 第六時・「白い雲」の合唱のまとめをする。
 - ・「エーデルワイス」の合奏のまとめをする。

④ 本時の目標（第五時）

- * 音の重なりの美しい響きを感じながら合唱や合奏をすることができる。

(2) 授業記録

挨拶と同時にチャイムが鳴る。チャイムが鳴り終わらないうちに教師は次の発問をする。

『今日は、エーデルワイスを先にやります。ところでエーデルワイスって何？知っている？』

「花の一種だと思います」（金子君）

『そう。エーデルワイスって花だね。どんな花だか知っている？』

さっと一人の子どもが手をあげる。

『あっ、佐藤君知っている？』

「アルプス地方に咲く草花で、ウスユキ草の一種です」（佐藤君）

『実はね、先生、エーデルワイスの花を実際に書いてきました。ジャッジャジャ〜』と言って、エーデルワイスが書かれた画用紙を取り出し、子どもたちに見せる。

『エーデルワイスってこういう花なんだよ。茎がずいぶん細いでしょ。かわいらしく、小さい花なんです。みんながよく知っているひまわりは、これくらい背が高いでしょ（実際に高さを示す）。

このような背の高い、大きな花ではなくて、小さな花でだいたい 20 cm くらいの花なんだよ』

教師は画用紙を黒板にはる。

ストップモーション

- ①出だしの部分は、チャイムが鳴り終わってから発問するべきである。チャイムが鳴っている状態では、子どもたちの注意力が散漫になる。
- ②教師は画用紙を取り出すことに神経が集中していたようだ。したがって発問が誘導的になっている。エーデルワイスに関して初めて発問するのであれば、一人の子どもの意見だけでなく、他の子どもの意見も聞く配慮が必要である。

『今みんな、この曲をリコーダーで練習しているよね。実はこの曲に歌があるのです。エーデル

ワイスっていう歌があるのです。テープを用意してきたので聞いてみましょう。白い小さい花の様子をこんなふうに歌っています。よく聞いてみてね』

こう言って、エーデルワイスの範唱テープをかける。子どもたちが聞いている間、教師は机間巡視をする。

ストップモーション

- ③ここでの机間巡視はそれほど意味のあるものではない。むしろ教師は、鑑賞の雰囲気づくりに心掛ける必要がある。状況が許すのならば、教師自身もその曲を傾聴することが大切である。

『こんな感じの曲なのです。こういう可愛らしく、白い花のイメージを思いうかべながら、リコーダーで吹いてみましょう』

『この前の時間は1番と2番のパートをやりました。まず、1番のパートをやりましょう。先生が指揮をします』

ストップモーション

- ④せっかく鑑賞したのだから、子どもたちにどんな光景を思いうかべたか、聞いてもよかったのではないか。子どもたちは、それぞれ独自の思いうかべ方をしたはずである。子どもによっては、自分の身近にある小さな白い花を思いうかべた子どももいるのではないかと思われる。

教師は指揮棒を用意する。教師の指揮で1番のパートをリコーダーで吹く。

『はい、みんなよかったね。ところで、リコーダーを吹く時はどんな事に注意すればよかったかな？』

「タンギング」と数名の子どもが答える。

『タンギング、その他には？』

「息の量を同じくらいにする」とある子どもが答える。

『そうだね。今の演奏は、みんな息の量、同じくらいでよかったよ』

ストップモーション

- ⑤演奏の後の教師の評価表現は大切である。ここでは、「みんなよかったね」という評価表現が出されている。しかし、この場面での教師の評価表現は、次の演奏への意欲づけにつながるものである。したがって、どんな所がよかったのか(どんな所が悪かったのか)、という具体的な評価表現が必要ではないか。
- ⑥教師の話し方や視線が気になる。前の2～3列しかも教師の前にいる数人に対して話している感じである。また、やや早口の傾向がある。

『それでは、2番をやってみましょう。2番は1番よりちょっと難しいから、今あげた事に注意しながらやってみましょう。同じように先生が指揮をします』

教師の指揮で2番のパートをリコーダーで吹く。

『2番は、ちょっとむずかしいね。特に楽譜の右半分むずかしいです。右半分のはじめのところ

をやってみましょう。シーシレファからミレファーまで、2段目の3小節までやってみましょう』
教師の指揮で2番の部分練習をする。

『はい、まだ吹けていない人がいますね。そういう人は、ここだけは吹くぞっと予め構えておいてください。レならレを予め押さえる準備をしておくのです。今度は1番と2番を分けて合わせてみましょう。ここからこっちにすわっている人は1番。ここからこっちの人は2番をやってください』

ストップモーション

⑦教師が言うように吹けていない子が目につく。その子どもたちをこの授業の中でどのように指導していったらよいのか、難しいところである。

教師の指揮でリコーダー合奏（1番・2番）をする。

『はい、前の時間より1番・2番そろっていたよ。息の量をしっかりと同じくらい出しているからだよ。今度は、1番・2番を入れ代わってやってみましょう。こっちが1番、こっちが2番です』
1番・2番を入れ代わって合奏する。

『1回目よりだいぶよくなったね。ただ、はじめの部分のテンポが速くなってしまったよ。エーデルワイスの合奏、だいぶできるようになったね。実際には3番のパート、4番のパートもあります。少しずつ練習していきましょう』

『それでは、次は白い雲をやきましょう』

ストップモーション

⑧本時の目標は、「音の重なるの美しい響きを感じながら合唱や合奏をすることができる」である。たとえこの段階（1番パートと2番パート）であっても、二部に分けているのであるから、「音の重なるの美しさを感じさせる」ような教師の何らかの働きかけがあってもよかったのではないか。

⑨ここでも「だいぶよくなったね」という評価表現を用いているが、具体的にどの点がどのようによくなったかを明確にすると効果的なのではないか。更に時間が許せば、評価を子どもに求めるのも効果的である。

子どもたちはエーデルワイスの楽譜をしまい、教科書の白い雲のところを開く。教師は、予め用意してあった移動式黒板を移動させる。その黒板には楽譜が書かれた模造紙が貼られており、さらにそれが見えないように別の模造紙が貼られている。

『今日は、先生の宝物を見せます。それはいったい何でしょうか？ ここにあります。何だかわかる？へへ、ジャッジャッヤーン』

かぶせてある模造紙を取り外す。その下には、白い雲の楽譜が貼られている。

『みんな見える？後ろの方まで見える？ それではみんな、起立して』

ストップモーション

⑩子どもたちに「いったい何であろう」と知的好奇心を引き起こすような教師の働きかけは大切である。ここでも、子どもたちに興味を持たせるという意味では楽譜をかくしておいたのは有効であったと思われる。しかし、「いったい何であろう」と問いかけている

わりには、かくしておいた物があまりにも平凡であった。

- ⑪楽譜を黒板に用意したのは、子どもたちを教科書から離れさせる意味で有効である。
- ⑫黄色の模造紙は一般的に光りやすいので、今日のような晴れた日には、不向きである。

子どもたちが起立し始めると同時に、教師は次のような発問をする。

- 『歌うときは、どんなことに気をつければいいの?』
- 『足は? (子どもたちの様子を見て) ……そう』
- 『胸は? (子どもたちの様子を見て) ……背中まがっている人いるよ』
- 『目はどんな状態? (子どもたちの様子を見て) ……そう』
- 『口は?』と教師が聞くと、多くの子どもたちが「卵を飲み込むような感じ」と答えた。

ストップモーション

- ⑬『起立』がかかって子どもたちがガタガタしている時に発問しても、聞いていないことが多い。発問する時は、子どもたちが完全に1つの動作を終えてからするべきである。
- ⑭ビデオで見る限り、歌う姿勢の指導が全員に徹底されている状態ではない。したがって、教師の方で、足はこれくらい開くんだね、胸はこうするんだね、等一つずつ繰り返しながら確認してもよかったのではないか。

教師はピアノで単旋律（シードシラソ）を弾く。

- 『1番だけ、上のパートを歌いましょう。いち・にい・さん』
- 子どもたちは、教師の弾くピアノの単旋律に合わせて1番を歌う。
- 『はい、すわってください』

ストップモーション

- ⑮子どもたちの演奏の後は、いかなる場合であっても教師の評価表現がほしい。次への意欲づけにつながるからである。やらせっぱなしは、できるだけ避けるようにしたい。教師は常に子どもの演奏を評価する心構えが必要である。
- ⑯指導案にある発声練習はどうしたのであろうか。
- ⑰教師は、子どもたちを歌わせる時に右手で旋律を弾いた。この時間は、「白い雲」に入って5時間目なので、もう音取りの段階ではない。右手で旋律を弾くのであれば、左手で旋律に合う伴奏を弾いてあげてもよかったのではないか。

『今1番だけ歌ってもらったけれど、この歌を歌う時に注意するところがいくつかあったよね。あげてみてください』

- 「音をのばす」とある子どもが答える。
- 『どこをのばすの?』と教師が尋ねる。
- 「ながれてくのくのところ」と数名の子どもが答える。
- 『そうだね。ながれてくのくのところだったよね。あとは?』と言って予め注意事項を書いた画用紙を黒板にはる。

- 『たっぶりのばす。その他には?』
- 「やわらかい声で」とある子どもが答える。

『そう。やわらかい声ね』と言って予め用意していた画用紙を黒板にはる。

『あと、他になかった？・・・相内君』

「ながれてくのがに注意する」(相内君)

『そうだね。ながれてくのがに注意するんだね。がじゃなくて鼻濁音のんがね』と言って、教師は黒板にながれてくを書き、がに○をする。

『あとはなかったかな?』さらに教師は尋ねる。

『それでは、また起立してください』

ストップモーション

⑱「やわらかい声」というのは、抽象的でわかりにくい表現である。子どもたちが実際にどのようにすればよいのかわかるような具体的な指導言が必要である。

⑲ながれてくのがのところは、ただ注意をするだけでなく、歌の練習に入る前に、鼻濁音のんがと言わせる練習があってもよかったのではないか。

『今、上のパートを歌ったね。今度は下のパートを歌ってみよう。みんな下のパート、ちょっと自信なさそうに歌っているよね。下のパートで一番気をつけなければならないのは、ここの部分のこの音(3段目の4小節目のレのシャープ)だよ』と言って、黒板の楽譜を指す。

『見えない人はちょっと移動して見るようにして』

『歌ってみましょう。姿勢は? さっき、歌うときに注意するところ、いくつか出してもらったよね。それに注意しながら歌ってみてください。それでは、いち・にっ・さん』

教師の弾くピアノの単旋律に合わせて子どもたちは下のパートを1番～3番まで歌う。

『もう、だいじょうぶかな。歌えるかな?』

『今まで先生、ピアノで音をとっていたのだけれど、今度ピアノの音なしで歌ってみよう。だいじょうぶかな? 下のパートだよ。それではいち・にっ・さん』

教師の手拍子に合わせながら、子どもたちは下のパートを1番～2番まで歌う。歌い終えた後、教師は子どもたちをすわらせる。

『それでは、上のパートと下のパートを合わせてみましょう。舟尾さん、伴奏をお願いします。上と下を分けます。こちら半分は上、つまり高い方、そしてこちら半分は下、低いほうです。黒板にあげてある注意する点に気をつけて歌いましょう』

伴奏に合わせて合唱する。

ストップモーション

⑳歌唱指導の場合、子どもたちをすわらせたままやる場合と、立たせてやる場合がある。いずれにしても、それぞれ姿勢の指導があってもよいのではないか。特にすわらせたり、楽譜を見ながら歌う場合は、姿勢がくずれていることが意外と多いものである。

㉑多くの子どもたちは、教科書を見ながら歌っていたが、この段階では、歌詞を見ないと歌えない状態であろうか。たとえ見るのであっても、せっかく黒板に楽譜が用意してあるので、黒板に注目させる工夫が必要ではなかろうか。

『みんなね、ながれてくのくをのぼすこと忘れていたよ。ここはたっぷりのばそうね。それに今日は、2番目の「やわらかい声」で歌えるようにしましょう。今度は上下逆でやってみましょう。

こちらが上、こちらが下です。たっぷりのばすことを忘れないでね』
伴奏に合わせて1番～3番まで合唱する。

ストップモーション

- ⑳ 『たっぷりのばす』という指示も具体性に欠けるものである。具体的に何拍のばすのか指摘したり、そこだけ取り上げて練習してもよかったのではないか。あるいは、指揮をしながら工夫してもよかったのではないか。
- ㉑ ここでも、合唱の後の評価がない。何らかの評価表現がほしいところである。

『今度は、久しぶりにテープを聞いてみましょう』と言って範唱テープを準備する。

『今日は、この後皆さんの合唱を録音します。今日はこちらが下の方、こちらが上の方をやってください。テープを聞きながら、上のパートの人は下のパートを、下のパートの人は上のパートを注意深く聞いてみましょう』

範唱テープの鑑賞をする。

『テープを聞いてみてどうでしたか？たっぷりのばしていたでしょ。それでは起立して。みんなの声がよく録音できるようにマイクを用意しました』と言ってマイクスタンドを真ん中にセットする。

『舟尾さん、また伴奏をお願いします』

黒板を指しながら、『みんな、注意事項を忘れないでね。今日は特に、やわらかい声で歌うことに注意してね』

ストップモーション

- ㉒ 『やわらかい声で』という抽象的な指示を繰り返すよりは、この曲のイメージを思い出させ、そのイメージからやわらかい歌い方を求めていく方向が必要ではなからうか。

教師は、録音の準備をする。

教師の指揮で、1番～3番まで合唱する。

『どうだった？緊張した？』

「鼻つまっちゃった」とある子どもが答える。

『これから録音したものを聞いてもらいます。できたてのほやほやの録音です』

黒板を指しながら、『先ほどあげた注意事項に気をつけながら歌っていたかどうか、聞いてみてください』

音がぼそぼそとしか聞こえてこない。子どもたちがざわつく。

『ちょっと録音された音が小さかったね。もう一回歌ってみましょう』

「えーっ」と子どもたちの声。

『もう一回挑戦してみよう。さっきより、より上手に歌えるように頑張りましょう！ さあ、みんな起立して。もう一回録音してみます』

教師の指揮で、1番～3番まで合唱する。

『それではすわって。聞いてみましょう』

2回目もうまく録音されていない。同じように音がぼそぼそとしか聞こえてこない。小さな音ではあるが、1番～3番まで鑑賞する。

ストップモーション

- ㉔これは、初歩的なミスである。事前にきちんと録音できる状態かどうか確認をしておく必要がある。あるいは別の手立てを用意しておくことも必要かもしれない。
- ㉕教師の指揮が単調である。気をつけなければならないポイントがいくつかあるので、その部分では最低限、工夫が必要である。歌に入る前の小節は少し大きくふってあげるとか、のばすところはふらないでのばしたり、やわらかい声を要求するのであれば、それなりの指揮の仕方があるはずである。

『今の録音聞いてみてどうだった？ のばさなければならぬ所、たっぷりのばしていた？』

『のばしていた』と数名の子どもたちがぼそぼそと答えた。

『やわらかい声はどうだった？』

『やわらかいと言うより、小さい声だった』とある子どもが答えた。

『ながれてくのがはどうだった？』と教師が発問したところで授業終了のチャイムが鳴る。

『下のパートの人、つられなかった？ 上のパートの人は、下のパートの人たちにつられなかった？ 下のパート、まだ不安定なところあるね。下のパートをもう少し練習してみましょう。今日はこれでおしまいだけれど、この次の時間に白い雲をもう少し練習しましょう。特に下のパート、鍵盤ハーモニカも使ってやりましょう』

『この次は、エーデルワイスの合奏のまとめと白い雲の合唱のまとめをします。それではこれで終わりますよ』

ストップモーション

㉖録音の状態があまりよくないので、全体的にしらけムードになっている。この状態で細かな点を子どもたちに聞くよりは、教師の方から評価表現を与えた方がよかったのではないか。たとえば、『今日はこの点がよくなりました。さらに次はここを直そうね』等の評価表現の工夫である。

㉗子どもたちにとって自分達の演奏を録音して聞くということは、客観的に良い所、悪い所を感じとれる、という点でとても有効な方法である。今回は、録音の失敗や時間の問題もあるが、子どもたちによる自己評価に重点を置いて指導すれば、「録音して聞く」ということがより生かされてくるはずである。

子どもが号令をかける。授業終了。授業時間は47分であった。

IV 考察と今後の課題

1 ストップモーション方式による授業記録の検討

筆者の担当している「音楽科教育法」の授業では、実習生の研究授業や経験豊富な教師の授業をいくつか取り上げ、このようなストップモーション方式で授業検討を数回行っている。最初は要領がつかめず戸惑っている学生も、回を重ねるごとにこの方式に慣れ、授業を検討する力（授業を見る目）が養われてくる。

今回取り上げた研究授業の授業記録を検討してみると、実習生の授業ということもあり、ストッ

プモーションでは初歩的なしきも基本的な問題の指摘が多い。

たとえば、①の出だしの部分の指摘、⑥の教師の話し方や視線の問題、あるいは⑬のような、指導案にはあるが実際授業では行われていない事に関する指摘、等である。これらのような指摘は、力のある経験豊富な教師の授業になると、減少する。

この方式に限らず、授業検討会では、参加者自身の力量の問題が関与してくる。教育実習を体験したとは言え、学生は所詮学生である。授業実践の乏しいことは否定できない。今回のような実習を終えたばかりの学生10人が集まったストップモーションの検討会と、10年以上教育現場に勤務している経験豊富な教師10人が集まったストップモーションの検討会では、取り上げる問題も討論の深みも当然異なってくると言える。

しかし、今回の学生による授業検討会では、前章で取り上げたように28箇所でもストップモーションがかかったのである。従来型の授業研究（授業検討会）をやったのでは、これだけの具体的な指摘は出てはこなかったであろう。この点は、高く評価されるべきであると考えられる。

また、今回の授業検討会に限らずストップモーション方式では、教授行為に関する指摘が圧倒的に多いと言える。

今回取り上げた授業記録の中の約9割近くは、教授行為に関するものである。とりわけ、発問・指示・助言等の指導言に関わる問題が多い。すなわち、①②④⑬は発問、⑬⑭⑮⑯は指示、⑱⑲は助言、⑳㉑㉒㉓は評価表現に関するものである。

さらに、③は机間巡視、⑩伴奏、⑫は指揮に関するものである。これらも音楽科における大切な教授行為である。残りの多くも、何らかの教授行為に関わるものと言える。

このように教授行為に関する諸問題が、終始授業の事実に着目して分析・検討できることは、他の方法にない大きなメリットである。

勿論、ストップモーション方式の検討会で取り上げられるのは、教授行為だけではない。今回の授業記録には特別見られないが、教育内容に関する問題、教材に関する問題、あるいは教師の教授行為に対する子どもの反応の問題等、さまざまな問題に関してストップモーションがかけられるのである。

今回の授業記録では、教師の教授行為の悪い面の指摘が多かったと言える。これは、前述したように授業者が教育実習生ということで、力量的にも未熟であることからすれば止むを得ないことかもしれない。

しかしストップモーション方式による授業記録では、その授業者の悪い面だけでなく、良い面、あるいはすぐれている所をできる限り取り上げていくべきである。悪い面を指摘し、それを自分自身の授業実践に生かしていこうとすることは大切である。それと同時に、すばらしい面に注目し、それを吸収し学んでいこうとすることも大切なはずである。特に、力のある経験豊富な教師の授業を検討する場合は、このような視点から授業を見ていくことが必要である。

2 ストップモーション方式の発展

ストップモーション方式の授業研究（授業研究会）には、さまざまなバリエーションが考えられる。藤岡信勝氏は、授業研究会のあり方を規定する条件を重要なものから次の六つをあげている^(註6)。

- ①参加者がナマの授業を見ているか、ビデオで初めて授業を見ることになるのか。
- ②研究会に授業者自身が参加しているか。
- ③解説者と参加者のどちらがより多く「ストップ」をかけ問題を提起する役目になっているか。

- ④ビデオは一台のカメラで録画されたものか二台のカメラで録画されたものか。
- ⑤参加者の人数は何人くらいか。
- ⑥関連する文書資料（特に授業記録）が手もとに用意されているか。

これらの条件により、あるいは組み合わせによりさまざまな授業研究（授業研究会）のあり方が考えられる。

ストップモーション方式がどのようなバリエーションを伴って発展しつつあるか、いくつか取り上げてみる。

第一は、「一人で行うストップモーション方式」である。これまで、公開研究授業等の授業をビデオに収め、それを再生し「この指導はまずいなあ〜」とか「ここはこうした方がいいのではないか」等、一人で検討することはあった。この程度の事であれば、数多くの教師が行っているであろう。これをさらに積極的にやろうとするのが、この「一人で行うストップモーション方式」である。特に自分自身の授業をビデオに収め、授業の改善に結びつけようとするものである。

第二は、「ミニ授業+ストップモーション方式」である^(註9)。優れた実践家の授業を参観できるチャンスは少ない。そこで、授業研究会において多くの参加者が優れた実践家のミニ授業（すなわち模擬授業）に参加し、その後ストップモーション方式で検討するという研究スタイルが生み出されたのである。ミニ授業というのは、約20分くらいで行われる授業である。参加者の中から生徒役の希望者が募られ、残りの参加者は周囲で参観するのである。

第三は、「リターンマッチ方式」である^(註10)。これは、「授業——ストップモーション検討会——再授業」という流れで行われるものである。ストップモーション方式で授業を検討すると、いくつかの問題点が明らかになる。それを踏まえながら、授業者はもう一回同じ授業に挑戦するのである。中学・高校には教科担任制がある。一人の教師が一日に何回か同じ内容の授業をすることがある。この「リターンマッチ方式」は、教科担任制の利点を活かした授業研究と言える。

今後の課題としては、できるかぎり数多くの優れた実践家の授業をストップモーション方式で検討し、さらに授業記録として残していくことを考えている。今回、授業記録を行ってみて、実際の授業を文字で記録するということが、いかに難しいものであるかが実感できた。記述の問題は、さまざまな問題を含んでいるので今後の課題とし、稿を改めたいと考えている。

[注]

- (1) 藤岡信勝 「ビデオをとめて授業の腕を上げよう」『授業づくりネットワーク』No.4 日本書籍 1988年 p.5-6
- (2) 注(1)の文献 p.6
- (3) 注(1)の文献 p.7-8
- (4) 注(1)の文献 p.8
- (5) 注(1)の文献 p.8
- (6) 藤岡信勝 「授業記録をどうかくか②」『授業づくりネットワーク』No.9 学事出版 1989年 p.99-105
「発語行為」は、言葉を発するという行為である。
「発語内行為」は、言葉を発する中で行われている行為である。
「発語媒介行為」は、言葉を発し、その中で何らかの行為を行うことによって、結果的になしとげられる行為である。
- (7) 注(6)の文献 p.98

| | |
|----|-------|
| T | |
| C1 | |
| C2 | |

上のように、教師の発言と子どもの発言をT、Cで区別し、テープレコーダー等からベタおこしたタイプの授業記録を「T-C型」授業記録という。

- (8) 注(1)の文献 p.8-9
- (9) 坂口隆 「ミニ授業とりターンマッチ方式」『授業づくりネットワーク』No.17 学事出版 1989年 p.8
- (10) 注(9)の文献 p.10

(本学講師 釧路分校)